

琉球大学学術リポジトリ

小・中学生のストレス反応と家族環境

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部附属教育実践総合センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 育子, 前原, 武子, Kinjyo, Ikuko, Maehara, Takeko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/9708

小・中学生のストレス反応と家族環境

金城育子* 前原武子**

Stress Responses and Family Environments in Children

KINJYO Ikuko MAEHARA Takeko

あいかわらず、いじめや不登校、薬物依存や中途退学、さらには、少年による凶悪犯罪の頻発といった、児童生徒を取り巻くさまざまな問題が深刻である。そのような、問題を理解し解決するために、心理学はこれまで、子どものストレスやストレス反応の分析、コーピングやソーシャルサポートのストレス軽減効果など、様々な面から検討してきた（例えば、長根、1991；岡安・嶋田・丹羽、1992；岡安・嶋田・坂野、1993；三浦・坂野、1996；藤野、1996など）。しかしながら、その多くの研究は、加齢による変化（発達差）を明らかにしていないし、また、その規定要因についても多くの問題点を残している。

これまで、多くの研究が中学生のストレスをめぐる問題に関心を示してきた。中学生が深刻な適応上の問題を呈することが多いからであろう。実際、中学生が「親子関係」、「先生との関係」、「友人関係」、「部活動」、「学業」、「規則」、「委員活動」など、多様なストレスをもつこと、また、「怒り・不機嫌」、「身体反応」、「不安・抑うつ」、「無力感」など多様なストレス反応を示すことが明らかにされてきた（金城・前原、1997；岡安・嶋田・丹羽、1992；岡安・嶋田・坂野、1992；岡安ら、1993）。しかし、中学生だけでなく小学生も、「親子関係」や、「友人関係」、「授業中の発表」、「学業成績」、

「学校システム」など、多くのストレスを抱えていることが報告されている（金城・前原、1997；長根、1991；嶋田・岡安・坂野、1992）。

では、中学生と小学生ではどちらが強いストレスを経験しているのだろうか。多発する小学生の問題行動を考えると、ストレスには両者に違いがあっても、その反応として起こるストレス反応は、小学生でも中学生に劣らず深刻な問題を内包していることが推察される。先行研究は小学生と中学生のストレス反応の比較検討を行なっていないが、性差の検討を行なっており（金城・前原、1997；岡安ら、1993）、中学生のストレス反応が男子より女子で強いことを報告している。小学生でも一貫して女子に強いストレス反応が見られるだろうか。本研究は、ストレス反応の強さが小学生と中学生の間で異なるかどうか比較検討すると同時に、その性差の問題にも接近することを第1の目的とする。

本研究の第2の目的は、ストレス反応を規定する要因について検討することである。これまで、ストレス反応の規定要因としてストレスを特定する研究がなされてきた中で、ストレス過程で機能するさまざまなストレス緩衝要因の効果を明らかにすることの重要性が指摘され、特にソーシャルサポートの効果が検討されてきた（Cohen and Wills,1985）。中学生を対象にソーシャルサポートの効果を検討した岡安ら

*琉球大学教育学部非常勤講師

**琉球大学教育学部

(1993)は、父親からの情緒的サポートによるストレス反応の緩衝効果が男子でなく女子だけで見られることを報告している。一方、小学生を対象とした前原(1998)は、男女ともに、そして父親サポートが母親サポートと同程度に無力感を低減させることを見出し、また、絶望感を取り上げた森・堀野(1992)も同様な結果を報告している。そのような研究結果の違いから、小学生においては中学生より、両親の情緒的サポートが効果的に機能しているかどうかがストレス反応の低減にとって重要な要因であることが予想される。その予想を確認するためには小学生と中学生を同じ土俵で比較検討する必要があることはいうまでもない。

しかし、ここで、父親と母親を独立に取り上げることに問題がある。父親や母親は夫婦という相互関係のありかたで、あるいは子どもの特性や他の家族構成員の特徴などによって異なるシステムの中で親子関係を築いている。そのような家族システムの視点に立った研究の必要性が、従来の親子関係研究の反省から指摘されてきた。ストレス反応を規定する要因について検討する際にも、父子関係、母子関係というより家族システムの機能状態を取り上げて検討する必要がある。これまでの家族システムの視点に立った研究は、家族内のサブシステムの特徴を取り上げる方向(たとえば、Gable, Crnic, & Belsky, 1994)とシステムとしての家族集団の特徴を取り上げる方向(たとえば、西出・夏野, 1997)がある。本研究は、後者の方向に位置し、子どもが認知する家族集団のシステム環境が子どものストレス反応にどのような影響を与えるのか、小学生と中学生を対象に比較検討しようとするものである。西出・夏野(1997)は、家族システムの機能状態を測定する「家族内コミュニケーション」、「家族に対する評価」、「家族の凝集性」、「家族システムの柔軟性」、「家族内ルール」のうち、前3つの下位尺度認知が中学生の抑うつ感の低減に貢献することを報告している。しかし、その性差や、小学生と中学生の違い、ストレス反応による違いなどへ関心を示した研究はほとんどない。本研究では、

第1の研究目的と連動して、多様なストレス反応を取り上げ、小学生と中学生の男女が認知する家族システムのどのような特徴がストレス反応の低減に貢献するのか検討することを第2の目的とする。

方 法

1. 家族システムの測定：前原・金城(印刷中)による家族環境尺度25項目。この尺度は、小学生および中学生に適応可能な尺度として考案され、「情緒的結合」、「価値・規範」、「遊離性」、「社交性」の4因子から構成されている。「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の5段階評定による。項目を表1に示す。

表1 家族環境尺度

情緒的結合	私の家族では、いろいろな面で助け合っていると思う 元気がない時、家族の誰かが、すぐに気づいて励ましてくれる 何か悩んでいる時、私の家族はいつでも相談相手になってくれる 何か嬉しいことがあるとき、家族のみんなでもろこびあう 私の家族は、なんでもよく話をする 家族には自分の意見を言いやすい 誕生日などの記念日には、家族みんなで楽しむ
価値規範	私の家では、何事にもベストを尽くしてやらなければ、ひどく叱られる 私の家では、学校でよい成績をとることが、とても大事にされている 手伝いなどのやるべきことをやらないと、家族からひどく叱られる 私の家では、きまりを守ることがとても大切にされている 家族で決めたことは、厳しく守られる 私の家では、時間をきちんと守ることがとても大切にされている 私の家では、何事もいい加減にすますことは許されない
遊離性	私の親には、友達が少ないと思う 私の家族は、私の友達の名前をほとんど知らない 私の家族は、地域のひととの付き合いがとても嫌いだ おしゃれや派手な格好で目立つことをしても、私の親は何もいわない 私の親は、私の将来に期待をかけていない 私の家族は、おたがいが、誰がどこで何をしているのかほとんど知らない
社交性	私の家族は、よく親戚付き合いをする 私の家族は、よく他の家族と食事をする 私の家族は、キャンプやビーチパーティが好きだ 私の家族は、よくスポーツをする 私の家族は、よく他の人をつれてくる

2. ストレス反応の測定：岡安ら（1992）を参考に、「不機嫌・怒り」、「身体反応」、「抑うつ・不安」、「無気力」について、各々6項目、計24項目を使用した。項目は表2に示す。5段階評定。

表2 ストレス反応尺度

怒り／不機嫌	不機嫌でおこりっぱい いらいらする いかりを感じる 気持ちがむしゃくしゃしている 腹立たしい気分だ 誰かに怒りをぶつきたい
身体反応	つかれやすい 体がだるい 目が疲れる 頭がくらくらする 腹が痛む 頭が重い
不安／抑うつ	不安を感じる 悲しい さみしい気持ちだ 泣きたい気分だ 心が暗い 気持ちが緊張している
無気力感	勉強が手につかない ひとつのことに集中することができない 頭の回転がぶく考えがまとまらない 体から力がわいてこない なにもやる気がしない 難しいことを考えることができない

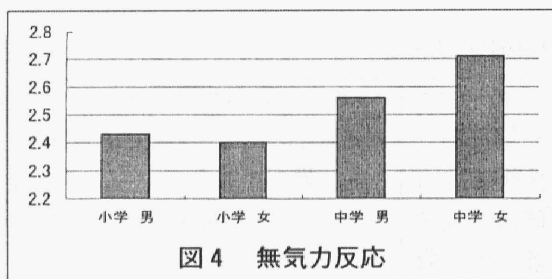
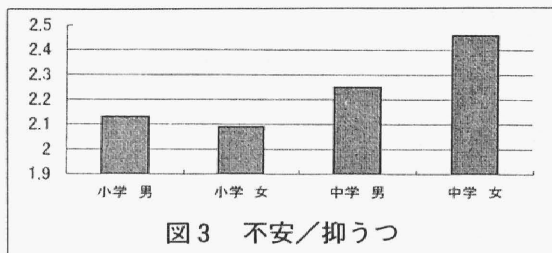
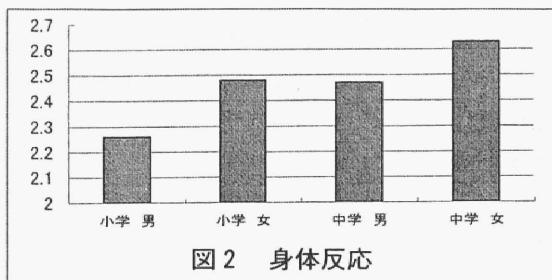
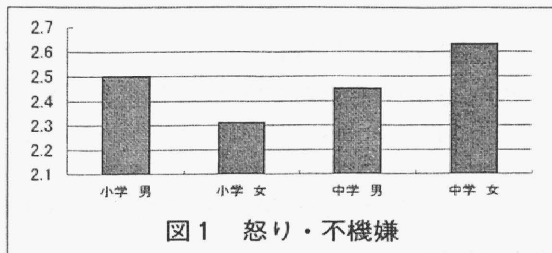
3. 被験者：沖縄県西原町の小学5、6年生546名（男子292、女子254）と、中学1年生201名（男子100、女子101）。

結果

1. ストレス反応の得点差

図1～4は、性別・校種別にストレス反応別の得点を示したものである。いずれのストレス反応でも中学女子の得点が高いが、性×校種の分散分析を行ったところ、「身体反応」だけで、男子より女子の得点が有意に高かった（ $F=4.28$ $df=1,717$ $p<.05$ ）。また、「不安・抑うつ反応」（ $F=6.75$, $p<.01$ ）、および「無気力反応」（ $F=5.98$, $p<.05$ ）で、中学生の方が小学生よりも有意に高い得点を示した。「怒り・不機嫌」だけで交互作用が有意傾向（ $F=3.50$, $p<.07$ ）が認められ、4群中、小学女子が、最も低い値を、中学女子が

最も高い値を示す一方、男子が、小中を通じて同程度の得点であったことを反映したものであろう。



2. ストレス反応を基準変数とし、家族環境を説明変数とした重回帰分析

校種別・性別に、家族環境の4因子を説明変数とし、各ストレス反応を基準変数とした重回帰分析を行った。その結果は、表3に示すとおりである。「怒り・不機嫌反応」に対して、小学校男子ではいずれの家族環境因子の影響力も見られないが、小学校女子では「情緒的結合」が負の、「価値・規範」および「遊離」が正の有意な値を示した。一方中学

校男子は、「社交」が負の、「価値・規範」および「遊離」が正の有意な値を示した。中学女子では、「遊離」が、正の有意な値を示した。

「身体反応」に対して、小学男子は「情緒的結合」が負の有意な値を、「価値・規範」が正の有意な値を示した。中学男子では、

「遊離」が正の有意な値を示した。小・中学ともに女子には、有意な値は確認されなかった。

「不安・抑うつ反応」に対しては、小学女子、中学女子とも「遊離」が正の有意な値を示したが、男子においては小・中学とも有意な値は得られなかった。

表3 家族環境を説明変数、各ストレス反応を基準変数とした重回帰分析

①小学校男子

	怒り・不機嫌		身体反応		不安・抑うつ		無気力	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的結合	-0.11	0.67	-0.38	8.84**	-0.09	0.53	-0.16	1.49
価値・規範	0.11	0.71	0.27	5.29*	0.22	3.07	0.13	1.04
遊離	0.12	1.15	-0.05	0.22	0.00	0.00	0.08	0.44
社交	0.12	0.83	0.06	0.28	0.13	1.03	0.06	0.27

②小学校女子

	怒り・不機嫌		身体反応		不安・抑うつ		無気力	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的結合	-0.31	7.26**	-0.09	0.58	-0.15	1.61	-0.25	4.86*
価値・規範	0.28	6.59*	0.18	2.26	0.11	0.86	0.26	5.62*
遊離	0.25	6.74*	0.20	3.75	0.26	6.3*	0.27	7.65**
社交	0.06	0.34	-0.05	0.00	0.08	0.52	-0.14	2.00

③中学校男子

	怒り・不機嫌		身体反応		不安・抑うつ		無気力	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的結合	-0.30	3.62	0.06	0.13	-0.14	0.70	-0.07	0.16
価値・規範	0.31	4.38*	-0.11	0.55	0.16	1.01	0.10	0.42
遊離	0.23	5.12*	0.24	4.76*	0.16	2.20	0.13	1.46
社交	-0.23	4.12*	-0.18	2.26	-0.13	1.05	-0.26	4.51*

④中学校女子

	怒り・不機嫌		身体反応		不安・抑うつ		無気力	
	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F	標準偏回帰	F
情緒的結合	-0.12	1.16	0.14	1.43	-0.10	0.74	-0.13	1.33
価値・規範	0.19	3.72	0.12	1.36	0.08	0.59	0.21	4.09*
遊離	0.33	11.44**	0.20	3.88	0.27	7.23**	0.22	5.07*
社交	-0.16	2.42	-0.21	3.74	-0.14	1.57	-0.18	2.90

p<.05*, p<.01**
a: 標準偏回帰係数

「無気力反応」では小・中学の女子が「価値・規範」および「遊離」で正の有意な値を示した。また、小学女子が「情緒的結合」で負の有意な値を、中学男子が「社交性」で負の有意な値を示した。小学男子における有意な値は認められなかった。

考 察

本研究のねらいは、まずストレス反応が小学生と中学生で、その性の違いによる特徴を明らかにすることであった。得られた結果は、女子における「身体反応」が男子より強いというだけの性差であった。われわれは先に（金城・前原，1997）、「不機嫌・怒り」および「無力感」が中学男子より女子で強いことを報告したが、岡安ら（1993）は、「不機嫌・怒り」では男子の得点、「抑うつ・不安」、「身体反応」では女子の得点が高いという結果を、日本の首都圏公立中学校の一般的特徴として解釈している。本研究の中学生は、それら先行研究と一致した結果を示さなかったことになる。

一方、小学生と中学生の比較検討を行なった結果は、「不安・抑うつ反応」および「無気力反応」が小学生より中学生で強く、しかし「怒り・不機嫌」および「身体反応」ではその差がないことを示した。たしかに中学生は小学生より多様なストレス反応を強く引き起こすものの、小学生でも、中学生と同程度にいらしたり、怒りっぽくなったりするし、疲れや体の不調を感じたりすることが明らかにされたことになる。興味深いことに、女子にあっては、小学校で「怒り・不機嫌」得点が低いものの、中学校では男子よりも高くなる傾向が見られた。この女子における変化の激しさは何に起因するのだろうか。今後、多様な規定要因の分析検討が必要である。

その規定要因の1つとして本研究は家族のシステム環境を取り上げた。家族環境の異なる側面が各ストレス反応にどのような影響力をもつか検討した結果は、ストレス反応の違いにより、また性の違いにより、あるいは小学生と中学生で異なるものの、「情緒的結合」と「社交性」

がストレス反応を抑え、逆に「価値・規範」と「遊離」がストレス反応を高める傾向を示すものであった。すなわち、「情緒的結合」の家族環境は小学女子で「怒り・不機嫌」および「無気力」を、そして小学男子では「身体反応」を低減することに貢献することが分かった。同じく中学男子では「社交性」も「身体反応」だけでなく「不安・抑うつ」にも低減効果をもつことが分かった。「情緒的結合」は家族相互の親密な関係を意味するものであり、ストレス反応を低減させるサポート機能をもつという本研究結果は、先行研究（西出・夏野，1997）の報告と同一方向にある。しかし、その効果が中学生に見られなかったことやすべてのストレス反応に見られなかったことは、家族が親密で支援関係にあっても、そのストレス反応低減に、特に中学生においては、効果的に機能するとは限らないことが本研究で明らかにされた。この結果が本研究の被験者の特殊性によるものかどうかは、今後さらに検討を重ねて明らかにしなければならない。

一方、本研究は、ストレス反応を高める効果をもつ「価値・規範」と「遊離」の家族環境を見出した。すなわち、小学男子では「価値・規範」環境が「身体反応」を、小学女子では「価値・規範」および「遊離」が「怒り・不機嫌」および「無気力」を高めるものであった。中学男子では「価値・規範」が「怒り・不機嫌」を、「遊離」が「怒り・不機嫌」および「身体反応」を、そして中学女子では「価値・規範」が「無気力」を、「遊離」が「怒り・不機嫌」、「不安・抑うつ」、および「無気力」を高めるものであることが分かった。「価値・規範」は学業達成や役割遂行、家族ルールに価値がおかれた環境を意味するものであり、「遊離」は、家族内外の人間関係の希薄さが目立つ家族環境である。それらが子どもに強く認知されるほどストレス反応を強める効果をもつことが小学生および中学生で明らかにされたことになる。

前原・金城（印刷中）は、小・中学生が「情緒的結合」の家族環境に対して満足感をもち、逆に「価値・規範」および「遊離」の家族環境

を否定的に評価することを見出した。本研究結果は、子どもが満足に思う家族環境がストレス反応を低減するために効果的に機能すること、しかし、それより明瞭なことは、子どもが満足に思えない家族環境がストレス反応を増大させることを示している。特に中学生のストレス反応を低減するためには、「情緒的結合」を補完する環境として、せめて「価値・規範」、「遊離」が強くなりすぎないように家族環境を整備することの必要性が示唆される。この時期の子どもたちにとって、家族からの過度の期待や拘束感、厳しい規律などは、「良い子」の役割と心理的自立との間の葛藤を生むだろうし、逆に家族からの関心や期待が低い「遊離」状況では自己の存在感を実感できない不安を喚起するだろう。その結果が重篤なストレス反応へと発展する可能性を本研究は示している。

藤野(1996)は、鑑別所に入所した少年男子を対象としたストレス研究の中で、「抑うつ・不安反応」および「無力感反応」の両ストレス反応が、非行の直前に強くなることを見出し、日頃少しずつ蓄積されていたストレス反応が、限界域を越えた結果として非行が起こることを報告している。さらに、小学校時代以前の生育歴上の問題を未だに解決できていない未解決群の場合、解決済みの安定群に比べてストレス反応の種類を問わず、非行直前にストレス反応を強く示し、未処理群では、ストレス反応が高まった状態、すなわち現状に耐えられなくなった状態で非行に至る場合が多いこと、非行後の変化は必ずしも減少するとは限らず、ストレス反応増強という場合も少なくないことを明らかにした。ストレス反応に耐えかねて非行化し、さらに一層強いストレス反応を招くという図式を明らかにし、特に保護者からのストレス刺激嫌悪度が、不機嫌・怒り反応、身体反応、無力感反応に強い影響力をもつことを明らかにしたのである。

本研究は、小学生でも中学生と同程度のストレス反応を示す場合があること、ストレス反応に大きな性差が見られないこと、中学生では家族集団の情緒的安定システムが機能しても、そ

れがストレス反応の低減には効果的に機能するものではないこと、逆に、小学生でも中学生でも、自己の価値や存在感が脅かされる家族システムは容赦なく彼らのストレス反応を高めることを見出した。得られた結果から、すでに小学校の段階で、家族環境の機能不全が子どもの適応上の問題を内包していることが分かる。

さらに、本研究は、中学男子の一部ストレス反応に対して、「社交」の家族環境が低減効果をもつことを見出した。この家族環境は、前原・金城(印刷中)が地域の特殊性として尺度の構成因に含めたものであるが、下位尺度としての信頼性がやや低く、また家族に対する満足感との関連性も低いものであった。しかし、中学生の自尊感情には正の影響をもつことが報告された。中学男子においては、情緒的結合関係にかわって社会的、開放的な家族環境が効果的に機能することが示唆される。本研究が見出した結果から、「情緒的結合」および「社交」家族環境システムの増強、同時に、「価値・規範」および「遊離」家族環境システムの緩和が、今後、不適応問題への予防的介入の1つの手がかりになることが示唆される。

引用文献

- ①Cohen, S., & Wills, T.A. 1985 Stress social support and the buffering hypothesis. *Psychological Bulletin*, 98, 310-357
- ②藤野京子 1996 非行少年のストレスについて教育心理学研究 44, 278-286
- ③Gable, S., Crnic, K., & Belsky, J. 1994 Coparenting within the family system. *Family Relations*, 43, 380-386
- ④金城育子・前原武子 1997 中学入学前後におけるストレスの性差 琉球大学教育学部紀要 第50集 287-295
- ⑤前原武子 1998 無力感とソーシャルサポートとの関連性に介在する統制感の効果 琉球大学教育学部附属教育実践指導センター紀要 第6号 55-60
- ⑥三浦正江・坂野雄二 1996 中学生における心理的ストレスの継時的変化 教育心理学

研究 44, 368-378

- ⑦森 和代・堀野 緑 1992 児童のソーシャルサポートに関する一研究 教育心理学研究 40, 402-410
- ⑧長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究 39, 182-185
- ⑨西出隆紀・夏野良司 1997 家族システムの機能状態の認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 教育心理学研究 45, 456-463
- ⑩岡安孝弘・嶋田洋徳・坂野雄二 1993 中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果 教育心理学研究 41, 302-312
- ⑪岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生のストレス評価とストレス反応との関連 心理学研究, 第63巻 第5号 310-318
- ⑫嶋田洋徳・岡安孝弘・坂野雄二 1991 児童の心理的ストレスと学習意欲との関連 健康心理学研究 vol.5 No.1 7-19